太平洋戦争下の勤労動員

●下高井戸四丁目
豊田　兼子
（大正八年生まれ）

私は終戦と同時に、木々の多い閑静な杉並区に移り住んで日々を送っております。昭和一六年一二月八日、開戦と同時に戦争も日一日と激しさを増し、銃後を守る婦人の責任も、重大の時期になってまいりました。

太平洋戦争は私の青春時代の真只中でした。未婚の女性は銃後のため地域別、女学校の同窓会別に女子勤労挺身隊が結成されました。カーキ色の上衣にズボン、鉄兜（てつかぶと）を背負った姿が若き女性の戦時下のスタイルでした。私は神田区（現千代田区）の地域の勤労動員に参加しました。最初は女学校（所在地、麴町九段）の同窓会の挺身隊で三鷹の中島飛行機製作所に奉仕、毎日工場内で、ベルトコンベアーに乗って流れて来る飛行機の精密機械の部品の組立て作業に、日の丸の鉢巻きをして愛国心に燃えて従事しました。

一年間の御奉仕終了後、東京都下三五区（戦時中）内に女子青年団が結成されました。神田区は茨城県利根川畔の農村に、食糧増産農繁期の共同炊事のお仕事に御奉仕のため、区内の女子団員は一〇班に分かれ、一班一〇名、一〇日間の期限で現地に入りました。農村の人手不足のため、農業従事の方々一二〇人分のお食事の炊事作業のお手伝いをしました。朝午前三時起床、星を仰いで炊事を始め、夜は星を見上げて、食事の跡片付け、明朝の支度の野菜の刻み、大きな鉄鍋の味噌汁、都会育ちの私たちは、本当に必死で勝つまではと、張り切って作業を致しました。

共同炊事より帰京後神田区役所教育課に勤務致しました。神田区の学童の集団疎開地は埼玉県北葛飾郡で、私は選ばれて我が母校神田区立淡路小学校の寮母さんとなって幼い生徒と一緒に寝起きをともにして、子供たちの身の廻りのお世話をさせて頂きました。引率の先生、お友達と、東京の親元を離れての団体生活、本当に戦時下の子供たちはしっかりしていたと思い出されます。その疎開学童たちが現在日本経済を支えて、大国日本の発展に協力してくれている姿を見ると、感無量です。そろそろ定年退職の年齢になっている事と思われますが？

罹災者物資配給のお仕事に従事して、三月一〇日、大空襲

下、本所、深川、江東区方面にて被爆された人々が爛れた眼、手足の火傷、真黒に煙で燻った顔、久留米絣の防空ズキンを被って、幼い子供、年老いた家族の手を引いて、焼け焦げて一望千里の原と化した街を、隅田川の両国橋を渡って、神田方面に列を作って重い足取りで、避難して来た姿は忘れられません。区役所で罹災者へのお見舞金（当時一世帯金五〇円支給）を頂くのに、取扱いの窓口に長蛇の列を作って、黙々と待っていた罹災者の方々。

投下される大空襲下の焼夷弾の炸裂する中を、区役所の非常時呼集の指令の中、須田町の我が家から、真赤に焼け落ちて行く神田小川町周辺の民家、丸の内方面の燃え盛る赤い夜空に十字に交差された探照灯の中のB29の姿を見ながら、同輩の友と、「災害」と書かれた腕章を巻き、急いで行った事等々。

東京都庁より罹災者への特別配給物資を、区内各避難所へ届けるため、区職員の方々とトラックに便乗して廻った折、避難された方々が涙を流しながら、合掌して配給の品々を受け取って下さった時の嬉しさ。

男子の方々は一人残らず遠く戦場へ、また、本土防衛のため女性の方々は勤労動員で、各方面に活躍した時代、戦後半世紀以上の歳月が流れて、豊かで平和な現在、戦時下の貴重な数々の体験は私の人生の一頁を飾っております。

本当に得難い賜であり、ボランティアでありました。感謝しております。

女子挺身隊での体験

●成田東二丁目
野辺　光子
（大正一四年生まれ）

私は昭和一八年八月一日、群馬女子挺身隊の一員として東京の陸軍被服本廠(しょう)亀戸出張所に軍属として入廠いたしました。

一八歳の真夏の暑い日でした。不思議と庭に咲いていた〝キョウ竹桃〟の赤い花が今でも鮮明に心に残ってます。初めて親元を離れて、ほとんど知らない友との寄宿舎生活で、とても心細い思いもしましたが、やはりお国のために私たちより、もっともっと遠い北海道・岩手の女子挺身隊の方々も、明るく元気にお仕事をしていましたので勇気づけられ、またみんなからも励まされ、友達にも恵まれました。

お仕事は主に軍人さんの服、毛皮の裁断、縫製でした。一年位は警報もほとんど発令されなかったので、外出日には友人と映画を見たり、亀戸の天神様の側の船橋屋で〝くずもち〟を食べたり、木炭のパーマネントをかけたり……写真屋さんで写真を撮ったり、束の間の青春を楽しく過ごしました。外泊も許可されましたので、一度だけ田舎に帰りました。

時折非常呼集があり、竹槍の訓練、防火訓練などをさせられ、夜半にも非常呼集がかかりますので、常に枕元には鉄カブト・ゲートルを置いて寝ていました。ゲートルの早巻き競争もやらせられ、慌てるので、せっかく巻き上げたのに、ずり落ちてしまって、泣きべそをかいたことも度々でした。

軍属ですので、外出時には左手に公用と書いてある腕章を巻いて行かれるのが、何となく誇らしく、胸を張って歩き、電車に乗っても、手すりも使用しないで立っていました。

昭和一九年に入りますと、東京上空にもＢ29が姿を見せはじめ、警戒警報が度々発令され出しました。お仕事の方も忙しくなり、昼夜交替で皆、一生懸命お国のために頑張りました。

一一月三〇日遂に〝第一回東京夜間空襲警報〟が発令され、〝房総方面よりの来襲で爆弾を投下〟したが、亀戸近辺は大丈夫でした。

昭和二〇年一月一日に警戒警報が夜中にあり、いったんは解除になったが、また三〇分後に空襲警報が発令された。以後はほとんど連日のように、警報が発令され、敵機が来襲し

た。私たちも、寝巻に着替えずにゲートルも巻いて寝てました。

そして三月一〇日の大空襲に遭遇する。今までは編隊を組んで爆撃されたが、この日は単機ずつの無差別の爆撃でした。とても寒い夜でした。防空壕に避難したが、爆弾の音、焼夷弾の落下する音、ヒヒューヒュー‼ドスン、ヒヒューヒュー‼ドスン……と地響き……耳をさくような金属音と不安で胸がドキドキ早鐘のよう、生きた心持ちはなかった。

そのうち防空壕の中が蒸し風呂のように暑くなって来てしまって、慌てて外に飛び出したが、驚いてしまいました。もう辺りは火の海、紅蓮（ぐれん）の炎で空気も、もう熱風化して熱くて、思わず防火用水にかけより、夢中で鉄カブトの上からジャブジャブジャブと水をかぶり、少し落着くと、私たちの寮が燃え出しており、思わず自分の部屋にとび込み、手さぐりでオーバーをひきずり出し身につけて逃げました。

一度も着てないオーバーなので身の危険も忘れ、夢中でした。そのうち軍人さんの〝寮生は大丈夫か！　寮生は大丈夫か！〟という大声が遠く近く聞こえ、とても心強く感じられた。助かった……と寮生全員、奇跡的にも無事に、近くの錦糸町公園に避難しました。そして夜が明けるのを待って、赤羽にある本廠に連れて行かれました。

亀戸から板橋までどの位歩いたか覚えてませんが、何せ火の粉と煙で皆眼をやられてしまう。痛くて開けていられませんでした。

三列に手をつないで歩き出しましたが、途中の川の中には死体が浮き、道路には焼けただれた都電、防空壕よりはみ出した死体につまずきながら……この世の地獄を見ながら行進しました。

赤羽に着いてからも、むごたらしい惨状が頭から離れず、食事も喉を通りませんでした。ここも時折、時限爆弾の破裂する音がドドーン！と聞こえる度に身の竦（すく）む思いでした。

四月に群馬に転属になりましたが、八月一四日にまた大空襲に遭遇！　両親と近くの広瀬川べりに逃げましたが、東京より軍隊のおらない田舎での空襲の方が精神的に怖い思いをしました。ほとんどの人が焼け出されてしまいました。

八月一五日、終戦の玉音が流れました。もう一日早く、この放送があったならと思うと残念です。生まれた町の想い出の小学校、女学校、友達の家と……全部焼けてしまいました。東京での戦災より田舎での方が口惜しく、情けなくて、いろいろな思いが過ぎ、とめどなく流れる涙は嗚咽（おえつ）にも……

悲惨な戦争はもう絶対に二度と嫌です‼

あれから四六年……挺身隊の乙女たちも、もう七〇歳前後になりました。初めて東京の被服廠に入廠した八月一日を記念して〝ユーカリ会〟とし、必ずこの日に戦友会を開いております。集まっては歌った軍歌も、このごろはほとんど歌うこともなくなりました。今年もまた八月一日が近づき、群馬女子挺身隊の皆に会えることを楽しみに待っております。

ずっと後で新聞で知り驚きましたが、あの下町を焼き尽し、

私たちも遭遇した三月一〇日の大空襲での死者の数が、何と一一万五〇〇〇人とか……。あまりにも多くの犠牲者……。それを知るにつけても、よくあの猛火の中から脱出することが出来たと、いまさらのように全身に震えを覚えます。そして天運に感謝してます。

今は亡き父が、私からの連絡が無いので上京し、亀戸の焼跡を見まして、白木の箱を抱いて帰る覚悟であったと話してくれました。犠牲になられました多くの方々に、ここに改めて御冥福を心よりお祈りいたします。

戦時貯蓄債券　15円

〈提供　井口米子さん〉

切符制度一覧（昭和18年６月現在）

開始年月	物資名	切符種類
昭和 16. 4	米　穀	家庭用米穀通帳 外食券 前渡米配給証明書 業務用米穀通帳
16. 4	小麦粉	家庭用小麦粉購入券 同上（特別用）
17. 5	パ　ン	パン類購入券 同特別購入券
16. 7	特殊需要者用パンおよび小麦粉	食パン購入券 小麦粉購入券
17. 2	ミソ・醤油	家庭用ミソ醤油通帳 家庭用ミソ特配券 家庭用醤油特配券 業務用ミソ醤油購入券
17. 1	塩	家庭用塩購入券
15. 6	砂　糖	家庭用砂糖回数購入券（一般用、特別用） 業務用砂糖購入券
16. 6	食用油	家庭用食用油購入券 同上（特別券）
15. 11	乳製品	育児用乳製品購入券 同上（特別券）
16. 11	牛　乳	飲用牛乳証明書
16. 12	菓　子	家庭用菓子回数購入券 出産祝賀用購入券
16. 4	酒　類	家庭用酒類通帳 家庭用清酒特配券
16. 11	魚　類	家庭用魚類購入券 業務用魚類登録票
17. 11	青果物	家庭用蔬菜購入票 大口業務用蔬菜購入票 小口　〃
17. 2	衣料品	乙種普通衣料切符 乙種特別衣料切符
16. 3	生綿およびガーゼ	家庭用精製脱脂綿購入券
16. 7		出産用綿、ガーゼ購入券
15. 10	地下足袋	地下足袋普通購入票
15. 6	マッチ	マッチ回数購入券 マッチ特別購入券
15. 10	燃　料	家庭用燃料通帳 業務用燃料割当通知書
17. 7	石　鹼	家庭用石鹼回数購入券 乳児用石鹼購入券 妊産用石鹼購入券
18. 6	ローソク	一般告別式用洋ローソク購入券 英霊　〃 神社寺院業務用〃
17. 8	塵　紙	特殊需用者用塵紙購入票
18. 6	洋　傘	商工省指定洋傘購入券
18. 6	氷	病人用氷購入券 牛乳冷却用購入券

注）東京市役所『東京市切符制沿革史』昭和18年より。

〈「新修 杉並区史 下」より〉

私の戦争青春時代

●本天沼二丁目
橋本　久美子
（昭和三年生まれ）

昭和一二年、小学校三年生の時、日中戦争が始まった。それが四年後に太平洋戦争に突入、正に泥沼に陥ったはてしない苦しい時代だった。軍国教育は昭和一〇年小学校に入学した時から施行されており、学校教育も軍国色に染まっていた。日中戦争が始まってからますますその傾向は強く、小学校でも軍事教練が取入れられ、敵愾（てきがい）心を植えつけられた。同級生の父親も何人か召集され、戦線へ送られて行ったが、残された家族たちは大黒柱を失い、生活と戦う毎日だった。町からはだんだん店先の品物が少なくなり、甘いお菓子など食べられなくなった。運動靴もゴム不足でなくなり、ゾウリをはいて通学した。「パーマネントをかけないよう、家に帰ってお母さんたちにいいなさい」と先生にいわれたこともあった。〝進め一億火の玉だ〟〝ゼイタクは敵だ〟〝ほしがりません勝つまでは〟などの標語が町のあちこちに掲げられたのもそのころだった。

昭和一六年、女学校一年生の年の暮れ一二月八日の朝、登校の準備をしていた時突然ラジオが臨時ニュースを放送し、真珠湾攻撃、米英との戦争開始が告げられがく然とした。緊張で全身がふるえた。その日を境にあの破滅的戦争に突入したのである。学校ではもう普通授業はしていられず、農村への勤労奉仕に慰問袋作りに全生徒が動員された。二年生の時父の都合で豊橋から鹿児島の学校へ転校したが、戦時色は一日増しに濃くなり英語は敵性語として廃止、音楽もすべて敵性国家のものは全廃、美しいメロディの外国の歌を歌えなくなったことは淋しかった。街には若い予科練の生徒が目立った。そのころ、一二月八日の真珠湾奇襲で特殊潜航艇即ち人間魚雷でアメリカ艦隊を攻撃し、戦死した九軍神の一人Y少佐が鹿児島市の出身であったため、その老母を学校へ招へいし講堂に生徒全員集めて「Y少佐をたたえる会」というのが行われた。軍神の母とほめそやされたその老母は、質素なみなりで我が息子を讃美する教師や生徒たちの言葉や歌をじっと聞いていた。後に聞いた話によると、その家は軍神の家と人々の尊敬を集めていたそうだが、敗戦と同時に石が投げ込まれたという噂で人の心の単純なうつり変わりに驚き、あの

しわだらけの老母を気の毒に思ったものである。
　数学の教師も農業科の教師も二人共召集され戦場へ旅立った。私たち女学生の姿はモンペに下駄ばきだった。衣類も食糧も日毎に厳しくなった。学校では女といえども軍事訓練が取入れられ、軍隊から若い将校が来てその指導に当たった。竹槍で米兵を突殺す訓練も毎日行われた。その敵国アメリカでは、核爆弾の製造に着々と手をつけていた時で、日本の私たちは戦国時代にタイムスリップし、竹槍で敵と戦う訓練をしていたのである。その合間に農村へ行き、田植えや麦刈りなどの勤労奉仕、なぜなら農村の働き手の男たちは皆戦場へかり出されてしまったので、人手不足に陥っていたからである。四年生の時授業は全面取止め、学校自体が軍需生産工場に切換えられ、生徒の家のミシンが全部徴収され、私たちは教師の監視下、兵隊用のシャツやズボン下などの類を毎日縫った。すでに戦況は不利で、敗戦の道を辿っていたとは知らず、勝利のかけ声に追い立てられるように働いた。
　そのころ四八歳の父が南方へ出征したのを機に、故郷の長野県へ引上げ疎開した。松本高女へ転校すると同時に長野県豊科町の呉羽紡績へ学徒動員され、飛行服や軍服の布地を織る仕事をした。冬の寒い時で燃料不足で火の気はなく、〇度以下になる工場の反物の間で、いっとき体をあたためたりして働いた。食糧は極度に不足し、軍需生産員としての特配の丼一ぱいの御飯は食べられたが、うすいみそ汁とおかずはいつもゴボウの葉や茎の煮付けみたいなものだったが、ガツガツ食べた。宿舎の窓から夜、外を見ると街は灯火管制で真っ暗。その三月何とか卒業式は行われたが、東京があの大空襲を受けた直後だった。サイパン玉砕、硫黄島玉砕などの新聞記事を見たのもそのころのように思う。
　学校を卒業して家に戻ったが、家も食物に窮しており、毎日食べられる野草を探しに行った。空腹で大きな声も出なかった。じゃが芋などが運良く手に入り、食べられる時は戦争も忘れ嬉しかった。飛行機のガソリンが無いとかで各家庭にヒマの種子が配られ庭にまいた。その種子を集めて飛行機用の油をとるということだった。ここまで武器もガソリンも無いのに戦争に勝つ訳がないとひそかに思った。
　昭和二〇年八月一五日の正午、重大放送があると聞き、ラジオの前に集まると、昭和天皇の重苦しい声が流れ、終戦を知った。その時あぁこれでやっと戦争の呪縛から解放される。電灯をつけて生活出来ると、ほっと肩の力が抜けた。私は一八歳だった。正義の戦いと信じていたあの戦いは侵略戦争であったと知ったのは戦後のこと。とにかく空腹では戦争は出来ないと悟った。父が南方から復員したのは終戦から半月後、秋風が吹き始めるころ、そして私たち一家の戦後の生活の闘いが始まったのである。

今思うあのころ

●荻窪一丁目
邑上　安弘
（昭和二年生まれ）

昭和二〇年九月一日、東部六部隊に入隊を命ず、との召集令状を受けながら、辛くも二週間前の、八月一五日に戦争は終わり、今にして思えば、人殺しの鉄砲を担がされずに済みましたが、もっとも、その時分、配るだけの鉄砲は無かったようですが（徴兵検査は丙種なのに、格上されて第二国民兵役と呼ばれました）。

昭和二〇年四月、蒲田区東蒲田一丁目と、五月に赤坂区新町で、二回戦災を受け丸裸になりましたが、幸い怪我もせず、身体だけは無事に、逃げおうせました。

帝国海軍は、規格外は採らぬ。来年又来い！

権力と、教育とは恐しいもの。何がなんでも、お国のため、天皇陛下の御ためにお役に立たねばと、そればっかりを思わせられるようになりました。小学生の身ながら、海軍少年航空兵に志願したのです。試験場は品川区役所の講堂でした。

試験の日、母は、何処で手に入れたのか、赤飯をアルミの弁当に詰めていいてくれました。猿股一枚になり、紙紐で首にかけたボール紙を丸に切った番号札。七九でした。泣くと読みました。ダメだなと思い、ガッカリしました。簡単な数学と国語の試験があって、早くも三分の一くらいが落とされました。ろくな勉強をさせてもらえなかったからでしょうか。

身体検査になりました。体格のいい奴の間に、谷間のように、ポツンポツンと背の低いのが番号を呼ばれ、次々に身長計に立たされました。私もその一人でした。一四五センチ！不合格！と告げられました。F海軍中佐と名札のある机に駈けよって、飛行機が駄目なら、特殊潜航艇に乗せていただきたくあります！大声で申告しました。F中佐は、貴様のその意気やよし！帝国海軍は規格外は採らぬ！来年また来い！と怒鳴られ、兵曹長に腕をとられて退場でしたが、お蔭で私は命拾いした事になりました。合格した仲間のほとんどは、正に、南瞑の遙か彼方、海の藻屑となってしまったのですから。

ニッポンよい国　花の国　七月、八月、灰の国

Ｂ29爆撃機は、無差別爆撃と共に民心攪乱戦術として、たくさんの伝単を撒き散らしました。意外と稚拙なマンガも多く、敵の知識もこの程度かと、内心小馬鹿にしていました。伝単を拾ったら、すぐに交番に届けるか、警防団員に渡すよう軍命令が、回覧板で何回も来ています。一枚位はそおっとしまっておこうかと思いましたが、勇気のいる事で、とても出来ません。命令に逆らえば、たちまちに非国民だといわれ、ビンタやら、迫害に遭うのですから、拾ってチラッと見て、一目散に交番へ届けたものでした。そんな中で、「ニッポンよい国花の国、七月、八月、灰の国」の見出しの伝単だけは、今でも覚えています。予告通り八月、日本国中を灰だらけにされ、あまつさえ非人道的な原爆を叩き込まれて、無条件降服させられたのですから。

自分勝手なお前らに、払う金はない！

八月一五日、オンボロラジオから、切れ切れに、ボソボソと流れる声。「天佑を保有し、万世一系の～」から始まる、あのポツダム宣言を受諾し、無条件降伏をするという天皇の声。玉音放送でした。生まれて、初めて聞く、現人神（あらひとがみ）の声でした。涙が後から後から、湧きあがって来ます。果たして日本はどうなるのか、我々に明日はあるのか、恥かしめを受けるなら、死を真剣に考え続けました。結論が出ません。

翌一六日、朝早くから詰めかけて来た人々によって、郵便局の公衆溜は、超満員になりました。当時私は、通信院（今の郵政省）内郵便局の貯金係の窓口担当でした。日本が戦争に負けたんだから、とにかく、俺の貯金だけは払い戻してとの魂胆でした。取付け騒ぎのそれでした。途端に私は、ムラムラっと怒りを覚え、カウンターの上に立上って、日本が戦争に負けたというのに、明日からの日本がどうなるのか判からないというのに、お前らは自分の事だけしか考えられないのか！　そんな奴らに払う金は無い！　と叫んで手提金庫に施錠し、大金庫に格納して今でいう職場放棄を行いました。瞬間、公衆の喧騒は静まりましたが、私が離席した後、大変な騒ぎとなったようでした。私の行動は、一途な若気の正義感といえましょうが、今考えると、矢張り戦争がもたらした、一種の狂気だったとも思えます。そして戦後の大混乱に入って行ったんですね。